

第30回イタリア言語学会国際大会（パヴィア、1996年9月26日-28日）報告

XXX Congresso Internazionale di Studi della Società di Linguistica Italiana

(Pavia, 26-28 settembre 1996)

1996年9月26日から28日まで3日間、パヴィア大学において第30回イタリア言語学会国際大会が開催された。パヴィアはミラノの南西40キロに位置し、古い大学と郊外のパヴィアの僧院（Certosa）で知られる都市である。本大会は議長を務める地元の P. R a m a t 教授を中心に主要テーマを“ロマンス語の史的統辞論”とし、講演・研究発表が合わせて40点に及んだ。とくに近年国際的にも注目をあびている文法化がとりあげられ、盛んに議論された。P. R a m a t は、veruno (< vere unus) が nessuno (< nec ipse unu) と同じく否定詞「誰(何)も・・・ない」を意味するにいたる現象をとりあげ、これを北イタリア諸方言の例から統辞論的に説明した。しかしながら同教授は、最近の諸論文ではこのように“today's morphology is yesterday's syntax”といった文法化現象に対して、逆に文法に属する機能語の語彙化、すなわち脱文法化現象にもとくに注目しておられる。筆者もロマンス語における語彙化の論点と題して文法化に対して語彙化も対等な概念であるべきことを主張した。語彙化を二つのタイプに分類、すなわち文法単位の語彙化(例. -ismo > gli ismi)と統辞単位の語彙化(例. HOC ANNO > sard. occannu, sp. hijo de alguno > hidalgo)に分け、後者をさらに絶対的恣意性に入るものと相対的恣意性に留まるものに分類、相対的恣意性に留まるもののなかには接辞付加により語彙化を証明できるもの(例. press'a poco : pressapochismo)のほか、外心構造をなす合成語、略語を含めることを提案、結論として語彙化はいかなる種類のものであれ、統辞の史的な弱まりと見做しうることを、ソシュールのことばを引用しながら文法化は記号の絶対的恣意性から相対的恣意性への移行であり、語彙化はその逆方向への移行を意味すると述べた。ピサ大学の R. L a z z e r o n i は、ラテン語の比較形態素を語彙にとり込んだイタリア語 signore のように fonogenesi なる現象に対して、tempor-a > temp-oraをもとに campora, fuocora が出現するなど、いわゆる異分析による morfonogenesi の存在に注目し、一方は接続の消滅を、他方は接続の創造を前提とすることを指摘した。歴史言語学に誇るべき伝統をもつイタリアにおいて“文法化”への関心の高まりを示す計画であったといえよう。

大会の開催中、半日は会場を Certosa di Pavia へ移すなどの配慮があった。

なお1997年度の大会は9月下旬に現在の会長 L. L e n z i 教授を議長にパドヴァ大学で“イタリア語・イタリア方言の音素論と形態論”をテーマとして開催される予定である。

菅田茂昭 (Shigeaki SUGETA)